

六萬寺へおいでよ！ 第三回

平成三十一年三月二十一日

能楽・源義経が語る屋島の合戦

観世流シテ方奥川恒治

屋 島（やしま）

思ひぞ出づる昔の春。月も今宵に冴え返り。元の渚はここな
れや。源平互いに矢先を揃へ。船を組み駒を並べて。うち入
れうち入れ足並みにくつばみを浸して攻め戦ふ。その時何と
かしたりけん。判官弓を取り落とし。波に揺られて流れしに。
その折りしもは引く汐にて。遙かに遠く流れ行くを。敵に弓
を取られじと。駒を波間に泳がせて。敵船近くなりし程に。
敵はこれを見しよりも。船を寄せ熊手にかけて。已に危く見
え給いしに。されども熊手を切り拂ひ。終に弓を取り返し。
元の渚にうち上がれば。その時兼房申すよう。口惜しの御ふ
るまいやな。渡邊にて景時が申ししも。これにてこそ候らへ。
たとひ千金をのべたる御弓なりとも。御弓なりとも。御命に
は換え給ふべきかと。涙を流し申しければ。判官これを聞こ
しめし。いやとよ弓を惜しむにあらず。

義経源平に弓矢を取つて私なし。然れども。佳名は未だ半ば
ならず。さればこの弓を。敵に取られ義経は。小兵なりと云
われんな無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれな。力な
し義経が運の窮めと思ふべし。さらば敵に渡さじとて波に
引かるる弓取りの。名は末代にあらずやと。語り給へば兼房
さてその外の人までも皆感涙をながしけり。